

## 同心

「前住上人（実如上人のこと）仰せに、後生一大事と存ずる人には御同心あるべき由仰せられ候ふと云々」（御一代聞書）

「一、明應五年正月二十三日に富田殿より御上洛ありて仰せに、『当年よりはいいく信心なき人には御あひあるまじき』とかたく仰せ候ふなり。」（同上）

「二、同七年の夏よりまた御違例にて御座候ふあひだ、五月七日に『御暇乞に聖人へ御参りありたき』と仰せられて御上洛にて、やがて仰せに『信心なき人には逢ふまじぞ、信を獲る者には召しても見たく候、逢ふべし』と仰せなりと云々」（同上）

以上の中、初めは実如上人の御意であり、後の二文は蓮如上人の仰せである。いづれも同一の御心を示されたものである。信心の人に御同心なさるお心であり、後生一大事、仏法を求める人にも御同心なさるお心である。

私は近頃、この同心ということについて深く考えさせられている。

人は皆、人に同心することによつて、人に同心されることによつて、生活しているのである。であるから何に同心したか、誰の心に同じたかと言うことが、その人の生活が何であるかということを示すことになる。

「汝は、何事に同心したか、誰に同心したか。」

人の名利の心、愛欲の心、瞋恚の心、愚痴の心、等々、人の煩惱に同心すれば、ますます人の煩惱を増長せしめる。人が名利を求めている、その心を満足せしめてやる。如何にも親切のようであつて、実は人を墮落せしめる悪知識の役をつとめたのにすぎない。その人自身の信心の智慧が曇っているのである。聖人が、聖道の慈悲より、浄土の慈悲に転入されたのもこのためである。（歎異抄第四章）

甲と乙とが喧嘩をする、甲が乙を悪く言つて丙に話をする。丙に念仏がないと、それに同心して乙を敵にする。丙がもし甲のその瞋憎に同心しない場合、甲は丙をまた罵るであろう。罵られてもそれに同心しないで、丙はただ念仏の一道を歩みきるべきである。同心してもいけず、同心されても悪い場合、念仏の子は独り行く。

聖人や上人は、決して人の念仏の心以外に同心せられなかった。念仏の心、信心の人にのみ御同心なさるが故に、その周囲には、念仏の人が生れ、信心の行者が集るのである。

もし聖人が、名利に同心せられる方であつたならば、比叡の御山を捨てて出られはしなかつたのだ。悲しくもその頃の叡山は、名利や、権勢に同心を求める俗界と化していたのであつた。

光明団というところは、人の名利心に同心を求めてもならないし、名利心によつて来たものに同心してもならない。ただ、信心に同心すべきであり、念仏にのみ同心を求むべきである。その時、どうしても名利心の満足のみに生きようとするものは、出て行くであろう。それは悲しくもいたしかたのないことである。

悪は悪に同心し、善は善に同心し、信心は信心に同心する。されば、向上も墮落も、精進も懈怠も、同心の如何にあるのである。

もし僧侶や宗教家にして、門徒同行の人的親切にのみ同心して、その念仏生活に同心せず、信心に同心しないならば、ついに真の念仏行者は生れないであろう。

念仏のない寺、信心のない住職がいたのでは、如何にたびたび説教があつても、一人の真実の念仏行者も生れないのは、そのためである。

『蓮如上人遺徳記』に云く

「それ上人の御持言に云く、なにたる事を聞きといへども、心に叶かなふ事なし。もし一人なりとも、信心決定せしめんことをきこしめしたく思召と仰事おほせことありき、されば是を慶かぎりびたもう事限かぎりなし。」

上人が信心決定の人に御同心なさる様、知るべきである。

『御文章』一の十一に云く

「近頃はこの方の念仏者の坊主達、仏法の次第もてのほか相違す。その故は、門徒の方より物を取るを善き弟子といひ、これを信心の人といへり。是れ大きなあやまりなり、また弟子は坊主に物をだにも多くまいらせば、わが力かなわずとも坊主の力にて助かるべきように思へり、これもあやまりなり。」

と、同心の問題のあやまりを示されたものである。

『御一代聞書』に云く

「一。十二月六日に富田殿に御下向にて候ふあひだ、五日の夜は大勢御前へ参り候ふに、仰に『今夜は何事に人多く来りたるぞ』と、順誓申され候ふは『まことにこの間の聴聞申し、有難さの御礼のため、また明日御下向にて御座候、御目にかかり申すべしかの間、歳末の御礼の為ならん』と申上げられけり。そのとき仰せに『無益の歳末の礼かな、歳末の礼には、信心をとりて礼にせよ』と仰せ候ひき。」

一も信心、二も信心、頂くものも信心、お礼も信心、信心以外には求めたまわぬ蓮如上人の御念仏の世界、仰ぐべきである。この故に上人の一代真宗再興したのである。

又云く、

「世間の物語ある座敷にては、結句法義のことをいう事もあり、さような段は人なみたるべし。心には油断あるべからず。或は講談又は仏法の讃嘆などいう時、一向に物を言わざること大なる違なり。仏法讃嘆とあらん時は、いかにも心中を遺さず相互に信不信の義、談合申すべきこと也と云々」

み法の席においては、口をつぶつてもものを言わず、同心せず、世間の物語には心の底を動かしておしやべりをする。それは信がないが故である。世間の物語の席にも「心には油断あるべからず。」油断なく、念仏の心に住すれば、世間の話もまた、信を増長せしめるであろう。

誰に同心を求めたか。自分の何に同心を求めたか。誰に同心したか。他人の何に同心したか。この四ヶ条が、我が一生の鏡となるであろう。

三人、四人と、共に念仏しつつ食事を頂く。二十歳ばかりの娘、給仕に来る。私はこの子について何も知らない。

「名は何と言いますか。……お念仏が申せるか。」

「ハイ。」

それから一日経て、

「今朝の座談は大変有難かったが、明日の朝は貴女を出して鍛えるから、左様覚悟なさい。」

「先生、それでしたら父や母や家中をつれて来て、その中で恥をかきます。」

その朝が来た、本堂で例の如き示談の席が出来た。明覚が、

「これからはじめます、問題のある方は、先生の前に出てお聞き下さい。」

少しの間、誰も出ない。やがて彼女が出た。十分二十分と念仏生活について語る。何でもよく聞きとめる。やがて席を去る。

「先生、その子の家庭は不幸なのでございます……この度はじめてこの寺に先生がお出で下さるのを、どれだけ喜んでお待ちしていたか知れません」

と坊守の声。その子はもちろん、泣いている人が多い。すると、一方から、体の不自由な男がにじり出て来られる。父である。やがて母も出る。姉も出ている。四年前より、父が神経痛で足が立たず、生活が苦しくせまって来る、その中に光る彼女、しかも体が弱い彼女、涙の座談会、合掌して泣き入る六十男。

一人の給仕に出ている女の子、それを無視するか、馬鹿めるか、愚弄するか、仏の子、御同朋御同行として合掌するか。あゝよかつたく。誰も語らず、何も聞かない彼女の全貌がはつきりして来た時、私は思わず感謝の熱いものがこみ上げて来るのを感じた。指折り数えて待った先生が、彼女の眼に、耳に写る時、その先生の万一、思っただけでも戦慄する。如来は今日も同心の問題について教えたもう。

その夜の席に、この前の寺で、ただ一度給仕に来た人が参っている。雨の夜道を、峠を超えて二里同行たちと帰ってゆくとして、別れに来た。

「先生、有難うございました。それでは、夏、お出で下さるのを楽しみに、念仏して働きつつ、待たせて頂きます。」

「戦々競々として己をかえりみ、しかも大胆に念仏せよ。」

今日も昨日も、この一句が私にせまる。

「思案の頂上と申すべきは、弥陀如来の五劫思惟の本願に過ぎたることはなし、此の御思案の道理に同心せば佛になるべし。同心とて別になし、機法一体の道理なり。」(御一代聞書)

弥陀如来の五劫思惟の本願に同心すれば仏になる。ここにおいて同心の問題はその根本に帰る。如来の本願に同心して、機法一体の六字に生かさねず、念仏がその生命とならずして、どうして他の人の信心に同心することがあり得よう。念仏ぬぎにして人に同心した時、必ず、再び帰らぬ悔いを残すであろう。せつかく、有り難く念仏する人も、もしそれに同心しないならば、彼は必ず汝から去ってゆき、汝の周囲は、念仏なき悪友、悪知識によって満される。

念仏の子は念仏の子に同心する。

十五歳の我が子の名利心に同心せずして、これを厳戒し、やがて七高僧の一人として、不朽の聖者たらしめた源信和尚の母。もの思わすかな、同心の問題。